

グローバル社会時代に必要な資質・能力の分析

前 田 洋 一*, 西 村 公 孝**

(キーワード：グローバル社会時代，学校教育，資質・能力，カリキュラム)

1. 研究課題の設定

教育の現状を見れば，社会のグローバル化によって多様な喫緊の課題に直面している。1つ目は新しい知識・情報・技術が政治・経済・文化をはじめ社会のあらゆる領域での活動の基盤として飛躍的に重要性を増す「知識基盤社会」への対応であり，2つ目は，国籍や民族などの異なる人々が，互いの文化的違いを認め合い，対等な関係を築こうとしながら，地域社会の構成員として共に生きていく「多文化共生社会」への対応である。そして，最も重要な課題は「市民社会の成熟」への対応である。

事実，新学習指導要領では，グローバル化に対応した「持続可能な社会」の形成を緊要な課題としている。学校・教師に課せられた役割は，新教育課程の改善方向を視野に，グローバル社会時代において国の内外で新しい「公共」を創造し，21世紀の国家・社会の形成に主体的に参加する人間の育成をどのようにカリキュラムに位置付けていけるかである。そして，その任を受けるのが「グローバル公民性の育成を目指すグローバル教育¹⁾」であると考えられる。

そこで，次の3つの視点から，グローバル社会時代の目標概念設定のために，どのような資質・能力が求められているかを明らかにし，課題を設定することにしたい。

(1) 学校教育の視点からみたグローバル社会時代の資質・能力

「初等中等教育における国際教育推進検討会」では，国際教育を「国際社会において，地球的視野に立って，主体的に行動するために必要と考えられる態度・能力の基礎を育成する」ための教育としている。更に，同報告書²⁾では，個人が相互理解に基づく多文化共生という視点を持ち，国家の枠組みを超えた国際社会の一員として自己を確立し，発信を行い，主体的に行動できる人材であるとしている。特に，初等中等教育段階において，国際社会で求められる態度・能力について，

- ①異文化や異なる文化をもつ人々を受容・共生することができる力
- ②自らの国の伝統・文化に根ざした自己の確立
- ③自らの考えや意見を自ら発信し，具体的に行動することのできる力

を身につけることができるようにすべきであると提言し，これらは，個の特性に応じて，リーダー的資質の伸長にも配慮した教育を行うことを強調している。

また，大津³⁾は日本国際理解教育学会による国際理解教育の目標構造を「体験目標」，「知識理解目標」，「技能目標」，「態度目標」に整理している。この内，資質・能力と考えられる「知識理解目標」，「技能目標」を見てみると「コミュニケーション能力」，「メディアリテラシー」，「問題解決能力」をあげている。また，「態度目標」として「人間としての尊厳」，「寛容・共感」，「参加・協力」をあげている。これは，グローバル社会に求められる資質・能力と等価であると考えられる。

魚住⁴⁾は，グローバル社会の問題に挑戦し，グローバルな責任を担って行く上で不可欠な資質や能力を，「地球社会の一員として問題を認識し，取り組む能力」，「他者と協力的な方法で仕事をする能力」，「批判的体系的方法で考える能力」，「非暴力的態度で紛争を解決する意欲」，「人権への鋭い感受性と擁護能力」，「ローカル・ナショナル・インターナショナルのどのレベルの政治問題にも参加する意欲と能力」とし，これらが身につけば，グロー

*鳴門教育大学授業実践・カリキュラム開発コース

**鳴門教育大学授業実践・カリキュラム開発コース（兼）教職キャリア支援センター

バル社会に対応するための教育から「グローバル市民社会」の想像と発展を支え、「共生・協働の時代を開く教育」への新たな地平を拓くとしている。

多田⁵⁾は、グローバルな視野から地球市民として具備すべき資質・能力を「地球市民性」とし、それを構成する資質・能力として以下の3点を示唆している。第1は、歴史的・空間的かつ人や自然・社会・自己との立体的・相互的・共創的関わりを認識し良好な関係を構築できる資質・能力としての「関係性・つながり」。第2は、自立と共生の社会構築の基調としての多様性を尊重し、多様であることが発展の要因であるという認識を持ち、対立や異なる意見を生かしていける資質・能力としての「多元性」。第3は、変化する社会に適応でき、個性を持ちつつ、納得・共感のできる他者の意見や行動を受容し、自己変革し、自己成長していくことのできる「変革性」である。その上で更に、「当事者意識を持った主体的行動力」、「他者の文化的背景や立場などを推察・イメージする力や響感力」、「ポリフォニック・ポリフォニーな見方・考え方ができること」を付け加えている。

他には、今回の学習指導要領改訂にも影響を与えたPISAが示した「キー・コンピテンシー」⁶⁾がある。キー・コンピテンシーとは、「人生の成功」と「良好に機能する社会」に資するためのコンピテンシーであり、それは、「異質な集団で交流する」、「相互的に道具を用いる」、「自立的に活躍する」という3つの領域である。その核心は「思慮深さ」である。そしてそれが「人生の成功」と「良好に機能する社会」をもたらすものである。義務教育終了時にその育成を目指すものである。

特に、異質な集団で交流する力は、21世紀のグローバル化の進展に対応する能力として重視される。これは魚住や多田とも共通する提言である。

(2) 「グローバル教育」、「国際理解教育」、「国際教育」の概念整理

「グローバル教育」、「国際理解教育」、「国際教育」の相違点に関して、さまざまな議論がされている。たとえば、大津³⁾は、多文化共生社会および相互依存社会に必要な地球市民資質を育成する教育は「グローバル教育」であり、従来の異文化理解教育を中心とした「国際理解教育」より広領域を扱うものとして区別している。魚住⁷⁾は、両者はその方向性とするところが異なるとしている。その一方で、魚住⁴⁾はグローバル教育の目標や戦略が必ずしも「一枚岩」ではないことを示唆している。

学校現場では一般に「グローバル教育」という用語はあまり見られない。それに対して、「国際理解教育」もしくは「国際教育」という用語が使用されていることが多い。それは、総合的な学習の時間の創設で「国際理解教育」がクローズアップされたことによる。そこで、「国際理解教育」もしくは「国際教育」の現状を見てみることにする。

このことについて、教育現場では「何をすればいいのかわからない」という声がある。学校現場の現状を見ると、国際問題や環境問題等をテーマに、学習者の調べ学習を基に行われる実践が総花的に実践されている。また、山名⁸⁾の指摘のように、外国人を招聘しての国際交流などの例がある。これらの取り組みは「国際理解教育」や「国際教育」の一部であることは明らかであるが、目標やねらいが明確にされないままカリキュラムが実施されている。

この点に関して、佐藤⁹⁾は「国際理解教育」の現状を概観する中で、いくつかの課題を示している。その1つが、多様な理論が教育現場に入り込んだ結果、海外・帰国子女問題、外国人生徒といった対象別の実践、異文化理解・環境・平和といった領域別の実践、さらにコミュニケーション力、表現力といった資質に注目した実践が混在しているためだと指摘し、その解決のためには、多様な実践を一定の枠組みで整理し、実践の視点を明確にしていくこと、個人的資質を育成するカリキュラム論や学習論を明確にすることを示唆している。

これは、「国際理解教育」、「国際教育」に限らず、それらの概念を包括している「グローバル教育」においては、より大きな課題である。

(3) カリキュラムの目標の明確化

新しい時代の義務教育を創造する（答申）¹⁰⁾においては、「国際的に質の高い教育の実現のためには、義務教育の目的に照らし、今日のグローバル社会、生涯学習社会において、義務教育段階の学校教育で具体的にどのような資質・能力を育成することが求められるのかを明らかにすること、すなわち、義務教育の到達目標を明確化することが必要である」としている。つまり、具体的な資質・能力を明示した指導と評価の一体化という視座からも、到達目標、つまり、グローバル社会に必要な資質・能力を明らかにしておく必要がある。

教育現場では、カリキュラム開発は教師によるものがほとんどである。カリキュラムを構築していく場合に最

も重要なことは、その目標を明確化しておくことである。つまり、その教育活動が学習者にどのような資質・能力を育成することを目的としているのかを明らかにしておく必要がある。言い換えれば、現場の教師がどのような資質・能力がグローバル社会時代に必要であると認識しているかを明らかにしておく必要がある。

本研究は以上の認識により、教職大学院の演習を活用し、現職教員がグローバル社会時代を意識した人間形成の目標をどのように考えているかを明らかにすることを目標とする。

2. 研究の方法

方法としては、以下の2点で行う。

方法Ⅰ 教職大学院の演習を活用したグローバル教育の目標概念の抽出とその検討をする

方法Ⅱ グローバル社会時代の資質・能力と政策的な課題との関連をみる

3. 方法Ⅰ 教職大学院の演習を活用した目標概念の抽出とその検討

平成22年度前期授業「学習指導と学習評価」において行った、具体的な演習の展開とその概要を示し分析する。

(1) 「グローバル化」という潮流から教育目標を再考する

教育活動は、目的（ねらい）に応じて、目標を設定し具体的な内容と方法を具体的なカリキュラムに構成することになる。現職派遣の院生にとって、学習指導要領を対象化し現代社会の「グローバル化」という潮流から目標を再考する活動は、カリキュラム編成の力量を向上させる機会になると考え、本演習の課題を設定している。

演習の概要

具体的な演習は、4回の授業で以下のように展開した。

第1回授業 戦後の学力論の変遷及び「国際化」と「国際理解教育」の展開（講義）

第2回授業 グローバル化の定義とグローバル社会時代の課題（講義）

第3回授業 グループ・ワーク「グローバル社会時代に求められる資質・能力」（演習）

- ・個人でメモしてきた考えを付箋に書く（日本人として及び地球社会の一員として）
- ・校種別のグループに分かれて、付箋を利用したKJ法による概念化
- ・他の校種の成果の確認と共有化
- ・代表者による成果の発表及び質疑

第4回授業 課題の共有化とカリキュラム編成

校種別グループ（構成員数6～7名）が作成した資質・能力目標の概念化の模造紙から、担当教員1名が複製した概念化マップを作成し配付した。

(2) 方法Ⅰの結果

図A～Fは、校種別に分かれた院生たちがそれぞれのグループで作成した「グローバル社会時代に求められる資質・能力」の概念化マップである。グループA～Dは主に小学校教員、グループEは中学校教員、グループFは高等学校教員である。

①グループA（小学校）

日本の文化や歴史、自然を理解することで、日本人としてのアイデンティティを確立しながら、同時に他国の文化・歴史、自然を理解することを重要視している。そして、その両者を繋ぐものとして、「共生」を強く意識していることがわかる。その共生の具体的な要素として、人権感覚を養う

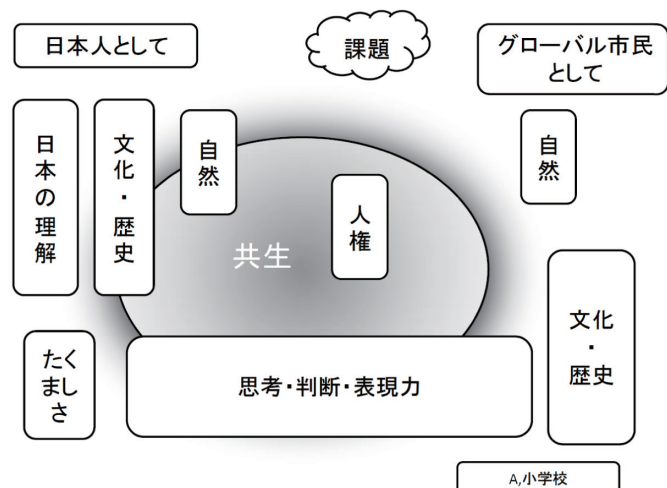


図1 グループAの資質・能力概念図

こと、必要な能力として「思考・判断・表現力」を中核に捉えている。

つまり、「たくましさ」を持ちながら「思考・判断・表現力」を持つことが、グローバル社会に必要な資質・能力であり、それは、共生するための必要要件であるとしている。これは、教育基本法の改定によって強調された内容である。

②グループ B（小学校）

異文化理解と言語力を中心とし、それを基に、「問題解決能力」、「コミュニケーション能力」、「人権意識」、「協働できる能力」をあげている。特に、人権に関する能力は協働できる能力を同義語であると捉えていることが象徴的である。また、必要な能力として「自己実現」と「相手意識」のバランスをとることを上げている。これは、他グループには見られないことである。

グローバル社会の変化に対応しながら問題解決できる能力が必要であり、これが変化に対応できる力であるとしている。また、そのような力をつけることが自立できる要件であるとしている。

③グループ C（小学校）

「判断力」が必要だとしている。判断力の構成要素は、個人の能力とスキルであり、それらの向上が基本となって、地球市民の資質・能力として構成される。さらに、日本人としての「他者との関わり」、「コミュニケーション力」が両者を繋ぐものとしている。また、日本人としての「愛国心」を取り上げているところが特徴的である。これは、グループ A でも取り上げられている「自国民としてのアイデンティティ」と同様の意味である。

最終的能力として、地球規模の課題を解決できる地球市民として、行動力が必要な能力であるとしている。また、その力の向上は個人の課題解決と日本に関する課題解決、地球課題の解決と往還しながら、より強固にされるとしている。

④グループ D（小学校・中学校）

「広い視野」を中心にしながら、「学力」を中心に据えている。「広い視野」は、「豊かな倫理観」によって支えられ、それがリーダー性を育むとしている。また、「広い視野」は、「社会や地球への貢献」できる自律的態度が必要であるとしている。

特徴的であるのは、自国の文化を理解するだけではなく、それを基に、日本や自分について、その価値を「説明できる力」という表現力にまで関わる力が必要であるとしている。これは、中学生という、発達段階や学習履歴を考慮したグローバル社会に必要な資質・能力を考察したことによる。また、「他文化理解」「情

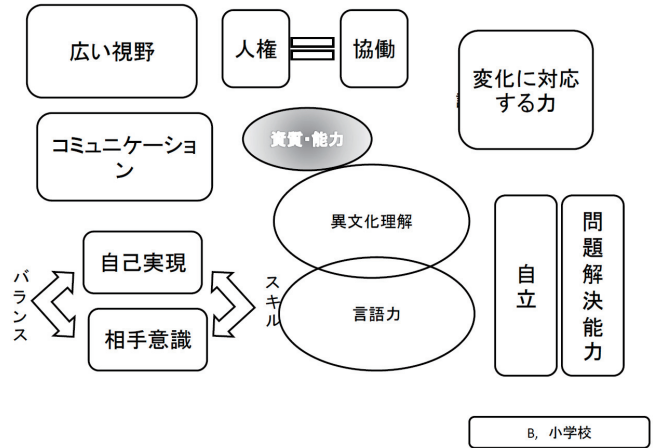


図2 グループBの資質・能力概念図

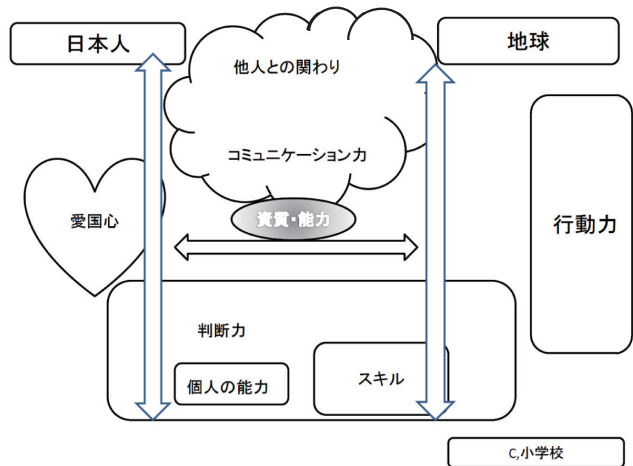


図3 グループCの資質・能力概念図

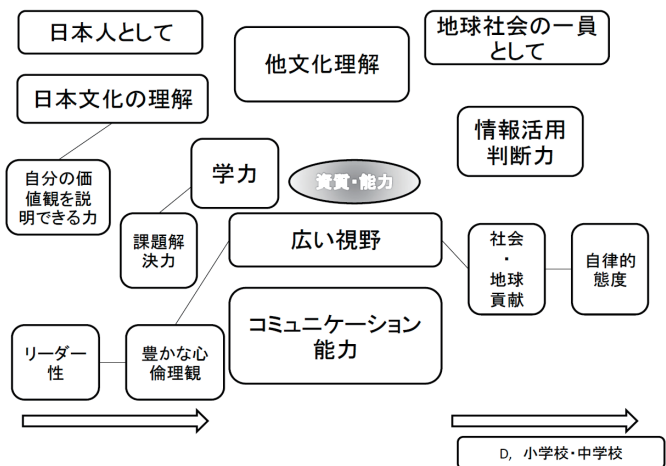


図4 グループDの資質・能力概念図

報活用能力」がスキルとして必要であるとしている。

⑤グループE（中学校）

「日本歴史・文化・伝統の理解」をスタートに、まず、「日本に貢献できる能力」が必要であるとしている。ただし、その能力としての具体的な能力は取り上げていない。その上で、「日本人」から「地球社会の一員」となる流れをとらえている。そして、その能力として「コミュニケーションの力」は単なる語学力だけではなく、世界に関する知識をベースとしたものでなければならないとしている。コミュニケーションの力は意思疎通だけのツールではなく、異文化を持った人々が相互理解するためのツールとして捉え、その裾野としての文化・歴史に対する知識が不可欠であるとしている。

自己確立できる資質・能力と日本、世界という枠組みではなく、自分と関わりのある世界の中で社会貢献できる資質・能力が必要であるとしている。

⑥グループF（高等学校）

核になる能力を「言語力」として、「環境問題を解決する能力」、「社会性」をあげている。また、日本に関する興味・関心を持ちながら、世界に誇るべき技術や文化を理解し、日本人としてのアイデンティティを持つことが必要な資質であるとしている。「子孫を残す」という表現は資質・能力としては誤解を受ける表現であるが、これは、日本人としてのアイデンティティを未来にまで残せる能力としている。

6グループの結果を概観してみれば、いくつかの共通点を探ることができる。まずは、1点目は、自国を初め他国の文化・伝統に関する知識・理解である。

2点目は、コミュニケーション力である。これは、小学校グループではコミュニケーション力として捉えられているが、中・高等学校グループになれば言語力という外国語教育を意識した表現に変わる。

3点目は、問題解決能力が多くのグループでみられる。

4. 方法Ⅱ グローバル社会時代の資質・能力と政策的な課題との関連

「グローバル教育」、「国際教育」に限らず、教育目的・方法や内容を検討する場合に、グローバル化、国際化に向けての社会構造の変化に対応する社会、知識基盤社会において育成すべき資質や能力を、政策的な課題との関連でみてみる必要がある。

この点に関して、松下¹¹⁾は、グローバル社会時代の資質・能力を「新しい能力」とし、討論を加えている。また、前田は¹²⁾経済産業省、内閣府、文部科学省等から示された「新しい力」について教育的視点と国際的・経済的視点からまとめている。そこで両者の示唆を参考にし、グローバル時代に必要な資質の能力について概観していく。

(1) 人間力戦略研究会

内閣府に置かれた人間力戦略研究会が2003年に発表した「人間力」がある。これは、国内製造業の海外移転の

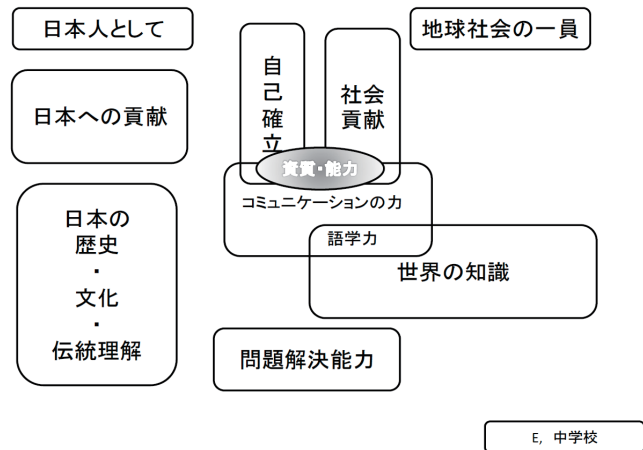


図5 グループEの資質・能力概念図

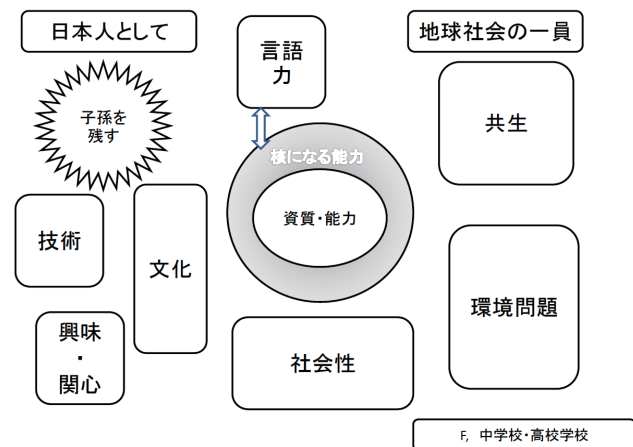


図6 グループFの資質・能力概念図

増大や、国際貿易に占める我が国輸出ウェイトの低下等にみられるように、経済活動のグローバル化による産業競争力の低下や、教育・雇用に関する構造問題に対応できる力として育成すべきものとして提案したものである。

この「人間力」について、『人間力戦略研究会報告書』¹³⁾では、人間力に関する確立された定義は必ずしもないとしながらも、「社会を構成し運営するとともに、自立した一人の人間として力強く生きていくための総合的な力」と定義している。そして、その構成要素を

- ①「基礎学力（主に学校教育を通じて修得される基礎的な知的能力）」、「専門的な知識・ノウハウ」を持ち、自らそれを継続的に高めていく力。また、それらの上に応用力として構築される「論理的思考力」、「創造力」などの知的能力の要素。
- ②「コミュニケーションスキル」、「リーダーシップ」、「公共心」、「規範意識」や「他者を尊重し切磋琢磨しながらお互いを高め合う力」などの社会・対人関係力の要素
- ③これらの要素を十分に発揮するための「意欲」、「忍耐力」や「自分らしい生き方や成功を追求する力」などの自己制御的要素をあげている。

(2) 経済産業省

経済産業省が示した「社会人基礎力（職場や地域社会の中で、多様な人々とともに仕事を行っていく上で必要な基礎的な能力として経済産業省が提唱する概念）」¹⁴⁾がある。経済産業省では「職場や地域社会で多様な人々と仕事をしていくために必要な基礎的な力」を3つの能力、「前に踏み出す力」、「考え抜く力」、「チームで働く力」と、それを構成する12の能力要素から成るとして定義づけした。その中で、チームで働く力（チームワーク）のための能力として、「発信力：自分の意見をわかりやすく伝える力」、「傾聴力：相手の意見を丁寧に聴く力」、「柔軟性：意見の違いや立場の違いを理解する力」を示している。

(3) 産学人材育成パートナーシップ グローバル人材育成委員会

先の「社会人基礎力」を受け、文部科学省と経済産業省が共同で事務局を務める「産学人材育成パートナーシップ グローバル人材育成委員会」は、「グローバル人材」¹⁵⁾に共通して求められるのは、通常の社会人に求められる①「社会人基礎力」に加え、②外国語でのコミュニケーション能力、③異文化理解・活用力であるとしている。

つまり、「グローバル・ビジネス」のなかで主体的に物事を考え、多様なバックグラウンドをもつ同僚、取引先、顧客等に自分の考えを分かりやすく伝え、文化的・歴史的なバックグラウンドに由来する価値観や特性の差異を乗り越えて、相手の立場に立って互いを理解し、更にはそうした差異からそれぞれの強みを引き出して活用し、相乗効果を生み出して、新しい価値を生み出すことができる人材のもつ能力として定義されたものである。

特に③については、「i）多様な文化や歴史を背景とする価値観やコミュニケーション方法等の差（＝「異文化の差」）の存在を認識して行動すること」、「ii）「異文化の差」を「良い・悪い」と判断せず、興味・理解を示し、柔軟に対応できること」、「iii）「異文化の差」をもった多様な人々の「強み」を認識しそれらを、引き出して相乗効果によって新しい価値を生み出すこと」の3点を明示している。

(4) 産学連携によるグローバル人材育成推進会議

急速に進むグローバル化に対応した人材の育成と、これを目指した産学連携による国際化戦略の構築という喫緊の課題に対応するために、高等教育、とりわけ、学部教育に焦点化し議論を重ねた「産学連携によるグローバル人材育成推進会議」は、平成23年4月「産学官によるグローバル人材の育成のための戦略」¹⁶⁾をまとめた。その中で、「世界的な競争と共生が進む現代社会において、日本人としてのアイデンティティーを持ちながら、広い視野に立って培われる教養と専門性、異なる言語、文化、価値を乗り越えて関係を構築するためのコミュニケーション能力と協調性、新しい価値を創造する能力、次世代までも視野に入れた社会貢献の意識などを持った人間」をグローバル人材であると定義している。

(5) グローバル人材育成推進会議

最も新しいところでは、「新成長戦略実現会議の開催について」（平成22年9月7日閣議決定）に基づき、我が国の成長を支えるグローバル人材の育成と、そのような人材が活用される仕組みの構築を目的として設置された

「グローバル人材育成推進会議」中間まとめ¹⁷⁾（平成23年6月22日）がある。これによれば、「グローバル人材」について概念整理をする中で、概ね、以下のような要素が含まれるとしている。「要素Ⅰ：語学力・コミュニケーション能力」、「要素Ⅱ：主体性・積極性、チャレンジ精神、協調性・柔軟性、責任感・使命感」、「要素Ⅲ：異文化に対する理解と日本人としてのアイデンティティー」。

このほか、「グローバル人材」に限らず、これからの社会の中核を支える人材に共通して求められる資質としては、「幅広い教養と深い専門性」、「課題発見・解決能力」、「チームワークと（異質な者の集団をまとめる）リーダーシップ」、「公共性・倫理観」、「メディアリテラシー」等。

5. 考 察

ここまでみてきた、現職教員が考える「グローバル社会時代に求められる資質・能力」をカリキュラム設計の視点からまとめ、政策的視点からみたものに対比させてみる。更に今後の課題を示す。

(1) 現職教員の視点と政策的視点

現職教員が考える「資質・能力」を、カリキュラムを設計する際に検討すべき内容である「知識」、「姿勢・態度」、「技能（スキル）」の視点から見てみることにする。

「知識」としては、自国や他国の文化伝統に関する理解が含まれ、「技術（スキル）」としては、コミュニケーション能力、言語力、問題解決能力、思考・判断・表現力、情報活用能力が含まれている。「姿勢・態度」としては、共生、異文化に関する興味・関心、たくましさ、相手意識、貢献などが含まれている（図7）。

一方、政策的な課題の視座からグローバル社会時代に必要な資質・能力について概観すると「普遍的能力：いかなる国・地域でも求められる能力」、「対応的能力：対象となる国・地域・人々によって変えるべき能力」、「文化理解能力：国や地域で異なることを理解する能力」に類型することができる（図8）。

「普遍的能力」には、共生力、チームワーク力、他者尊重力、思考力、責任感などが含まれる。「対応的能力」には、言語力、コミュニケーション力（この場合のコミュニケーション力とは語学力に関わることが多い）、情報発信力などが含まれる。「文化理解能力」については、異文化理解にとどまらず、自国文化の理解や他国の文化と比較することによって、互いの文化を深く理解する能力などが含まれる。

両者を比較してみると、カリキュラムの視点である、姿勢・態度は、政策的視点からみた普遍的能力と類似し、知識は文化的理解能力と、技術スキルは、対応的能力と類似したものになっている。

(2) 見えにくいグローバル教育の目的

院生が示した必要な能力の中には、「倫理観」「他者意識」「人権」など、教育の根幹に関わるものが含まれていることは注目すべきである。

このことについて山西¹⁸⁾は、「国際理解教育」を構成する、他の地球的課題（平和教育、環境教育、多文化教

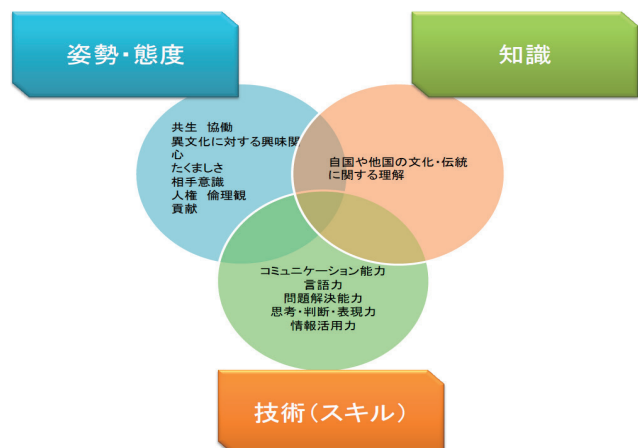


図7 現職教員の視点から見たグローバル社会時代に必要な資質・能力

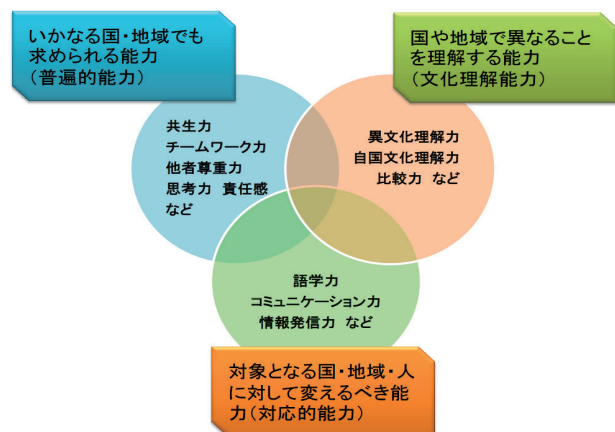


図8 政策的視点から見たグローバル社会時代に必要な資質・能力

育、人権教育)について関連性を図9のようにまとめている。このように、本稿が対象とするグローバル教育においても人権教育の目標を包括したようになっている。

このことについて、たとえば、埼玉県教育委員会がまとめた人権教育資料「指導実践の手引き¹⁹⁾」には「人権教育を通じて育てたい資質・能力」は以下のように示されている。

他人の立場に立つ想像力

- ①他の人の立場に立ってその人に必要なことやその人の考えや気持ち等がわかるような想像力、共感的に理解する力

コミュニケーションの技能

- ②考えや気持ちを適切かつ豊かに表現し、また、的確に理解することができるような、伝え合い、わかり合うためのコミュニケーションの能力やそのための技能

人間関係を調整する能力

- ③自分の要求を一方的に主張するのではなく建設的な手法により他の人との人間関係を調整する能力及び自他の要求を共に満たせる解決方法を見いだしてそれを実現させる能力やそのための技能

上記の記述は、これまで示してきた政策的視点から見た普遍的能力や現職教員の考えるカリキュラム構成上の姿勢や態度と非常に似通っている。確かに、「グローバル教育」は広範囲な概念を包有し、見えにくいスキルやディシプリン、コンピテンシーを扱っているのは事実である。つまり、普遍的能力や姿勢や態度を強調すればするほど「グローバル教育」の目的が見えにくくなる。

また、個人のスキルとしてコミュニケーション能力や表現力を強調すればするほど、外国人を招いての国際交流や児童生徒の調べ学習が主流である活動が注目され、実際に数多く報告されてきている。そうなればそうなるほど、普遍的能力や姿勢や態度が見えにくくなる。

平成23年度より、小学校において新学習指導要領が全面実施され、第5・6学年で年間35単位時間の「外国語活動」が必修化された。この目標は、音声を中心に外国語に慣れ親しませる活動を通じて、言語や文化について体験的に理解を深めるとともに、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育成し、コミュニケーション能力の素地を養うというものである。この流れは、個人のスキルとしての英語能力の向上を目指したものである。しかし、外国語を扱っているということをもってグローバル教育であるとは首肯しがたい。

6. 今後の課題

今後の課題を2点指摘する。

第1は、「グローバル教育」の目的が、先に示した政策的視点の「普遍的な能力」や、現職院生たちが考えた「姿勢・態度」能力なら、それを育成するための素材あるいは教材が、グローバル的な素材かどうかグローバル教育かどうかの鍵となってしまうのは甚だ問題である。

第2は、「グローバル教育」が今後、教育現場において成果を上げていくには、「グローバル教育」の理論と実践の結び付けが必要となる。教育現場においては、「国際理解教育」「国際教育」「グローバル教育」という枠組みの差異は重要ではないことは事実である。眼前の児童生徒を見て、彼らが担う未来に対して、どのような資質が必要なのか、その資質が身についているのかという視点からスタートし、「グローバル教育」が目指す個人的資質をどのようなカリキュラムにおいて育成すべきかを明確にしておくことが重要である。

今後は、本研究から得られた知見をもとに 実際のカリキュラム設計に反映させていきたいと考えている。

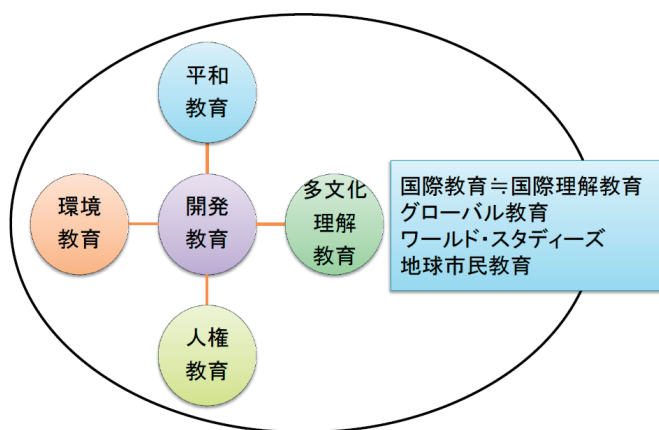


図9 国際理解教育と開発教育¹⁸⁾

【参考・引用文献】

- 1) 魚住忠久 グローバル教育－地球人・地球市民を育てる－ 黎明書房 1995 pp. 46－50.
- 2) 初等中等教育における国際教育推進検討会 初等中等教育における国際教育推進検討会報告 ～国際社会を生きる人材を育成するために～ 2005
- 3) 大津和子 国際理解教育の学習領域 国際理解教育カリキュラム開発の基本枠組み. グローバル時代に対応した国際理解教育のカリキュラム開発に関する理論的・実践的研究. 第1分冊. 平成15年度～平成17年度 科学研究費補助金（基盤研究(B) (1)）研究成果報告書 研究課題番号15330195 2006
- 4) 魚住忠久 「グローバル教育とは」 グローバル教育の理論と実践 日本グローバル教育学会編 教育開発研究所 2007 pp. 29－32.
- 5) 多田孝志 グローバルな視野から見た子どもの生活体験と学校教育（第1部＜特集＞子どもの生活経験と学校教育をつなぐ）学校教育研究（25）日本学校教育学会 2010 pp. 36－48.
- 6) ドミニク・S・ライチェン, ローラ・H・サルガニク編著, 立田慶裕監訳 「キー・コンピテンシー」 明石書店 2006
- 7) 魚住忠久 『グローバル教育』 黎明書房 1995 pp. 46－50.
- 8) 山名淳・相川充・浅沼茂・渋谷英章・橋本美保 グローバルシティズンシップ育成に向けての実践的教材開発東京学芸大学紀要 1部門 第56号 2005 pp. 57－70.
- 9) 佐藤郡衛 国際理解教育の現状と課題：教育実践の新たな視点を求めて（＜特集＞教育現場の多様化と教育学の課題）教育学研究74（2）日本教育学会 2007 pp. 215－225.
- 10) 中央教育審議会 「新しい時代の義務教育を創造する（答申）」平成17年10月26日
- 11) 松下佳代 ＜新しい能力＞概念と教育＞ ＜新しい能力＞は教育を変えるか ミネルヴァ書房 2010 pp. 1－42.
- 12) 前田洋一 異文化理解に必要なコミュニケーション－ダイアローグー 教育フォーラム48 金子書房 2011 pp. 49－59.
- 13) 人間力戦略研究会報告書 若者に夢と目標を抱かせ、意欲を高める～信頼と連携の社会システム～ 人間力戦略研究会 2003
- 14) 経済産業省 「社会人基礎力」とは
http://www.meti.go.jp/policy/kisoryoku/kisoryoku_image.pdf
- 15) グローバル人材育成委員会「報告書」～産学官でグローバル人材の育成を～産学人材育成パートナーシップ 2010
- 16) 産学連携によるグローバル人材育成推進会議 産学官によるグローバル人材の育成のための戦略 2011
- 17) グローバル人材育成推進会議 グローバル人材育成推進会議 中間まとめ 2011
- 18) 山西優二. 国際理解教育とは違うの？ 開発教育ってなあに. 開発教育協会 2005 pp. 14－15.
- 19) 埼玉県教育局市町村支援部人権教育課 人権教育資料「指導実践の手引き」 2010

Analysis Of Required Qualities And Capabilities In An Era Of A Global Society

MAEDA Yoichi* and NISHIMURA Kimitaka**

When we practice global education in the schools of compulsory education, we have to clarify the specific goals for compulsory education under today's global and lifelong learning society in accordance with the purpose of compulsory education. Therefore, we tried to clarify them with the following two methods.

Method 1: The qualities and capabilities that in-service teachers think are used to extract the target concepts and further examine them using the exercises of graduate schools.

Method 2: To consider the relationship between policy issues and qualities/ capabilities required in an era of a global society.

The following three points are made clear by the above-mentioned methods.

1 When "qualities and capabilities" that an in-service teacher thinks are seen with the perspective of "Knowledge", "Attitude/ behavior" and "Skill" that should be examined while designing a curriculum, the "Knowledge" includes the understanding of cultural heritage about one's own country and other countries, and "Skill" includes communication skills, language skills, problem-solving skills, decision making/ judgment/ expressiveness, and ability to use information. "Attitude/ behavior" includes such as harmony, intercultural interests, robustness, awareness about others, and contributions etc.

2 While taking a look at with the perspective of "Universal competence", "Responsive competence" and "Cultural understanding" in relation to policy issues, the "Universal competence" includes abilities such as harmony, team work, respecting others, thinking skill and sense of commitment etc.

3 From the above two points, the curriculum viewpoint of "Attitude/ behavior" is similar to the "Universal competence" of the policy viewpoint. The "Knowledge" is similar to "Cultural understanding", and "Skill" is to "Adaptive capability".

*Practice of Teaching and Curriculum Development, Naruto University of Education

**Practice of Teaching and Curriculum Development, (and) Center for Educational Career Development